系統的な古典学習指導の実践的研究
ー「比べ読み」を中心にー

教育実践力高度化コース
１７ＡＤ０１４
藤田　莉穂

【指導教員】　本橋　幸康　　安原　輝彦　　飯泉　健司
【キーワード】 系統性　　古典　　高等学校　　比べ読み

１．はじめに

平成 18 年度には教育基本法が改正(※1)され、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」が重視され、小・中・高等学校の系統的な古典の学習指導が求められている。本研究は、小・中学校の学びを生かした高等学校における「比べ読み」を中心とした古典の授業を構想することを目的とする。

２．国語科教科書における古典教材の分析

本研究では、調査対象として文部科学省が平成 30 年度使用教科書目録に示している小学校国語 5 社(※2)、中学校国語 5 社(※3)、高等学校においては必履修科目である『国語総合』9 社(※4)を対象として古文教材のみにしぼり分析を行った。小学校において、『竹取物語』、『枕草子』、『平家物語』は 4 社、『奥の細道』は 3 社、『徒然草』は 2 社に共通して掲載されていた。中学校においては、『奥の細道』『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『竹取物語』、『徒然草』、『枕草子』、『万葉集』、『平家物語』が 5 社に共通して掲載されていた。高等学校『国語総合』に掲載されている古文教材を表 1 にまとめた。『伊勢物語』、『宇治拾遺物語』、『奥の細道』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『竹取物語』、『徒然草』、『土佐日記』、『平家物語』、『万葉集』は 9 社、『枕草子』は 7 社に共通して掲載されていた。以上のことから、高校生が必履修科目として学習する『国語総合』では、『奥の細道』、『竹取物語』、『徒然草』、『平家物語』、『枕草子』など教材が小・中学校と共通する場合が多いことから、文法事項にふれたり口語訳を行ったりするという過程が加わる程度の変化のみで、高校生は繰り返し同じ教材にふれることになっていることが予想される。これでは、学習の広がりや深まりもなく、生徒の教材への興味・関心も薄れてしまう。小・中・高共通教材の扱い方の工夫が必要である。

表 1『国語総合』に掲載の古文教材一覧(平成 30 年度使用高等学校用教科書目録より)

	伊勢物語	伊曽保物語	今鏡	宇治拾遺物語	うひ山ぶみ	奥の細道	閑吟集	近世俳句	古本説話集	古今和歌集	古今著聞集	今昔物語集	更級日記	沙石集	十訓抄	正徹物語	新古今和歌集	竹取物語	玉勝間	徒然草	土佐日記	俊頼髄脳	百人一首	風姿花伝	風俗文選	平家物語	発心集	方丈記	枕草子	万葉集	無名抄	梁塵秘抄	大和物語
東京	○		○	○		○	○	○		○	○	○			○		○	○		○	○					○	○		○	○		○	○
三省	○			○	○	○				○		○			○		○	○		○	○	○				○		○	○	○	○		
教育	○			○		○				○	○	○	○	○	○		○	○		○	○					○			○	○			
大修	○			○		○				○		○		○			○	○	○	○	○		○	○		○			○	○			
数研	○			○		○				○				○			○	○		○	○					○			○	○			
明治	○			○		○				○				○			○	○		○	○					○			○	○			
筑摩	○			○		○				○			○		○		○	○	○	○	○				○	○		○		○			○
第一	○	○		○		○			○	○	○			○	○	○	○	○		○	○	○				○		○	○	○			
桐原	○			○		○				○	○				○		○	○		○	○					○				○			

３．「比べ読み」の必要性

(１)大学入学共通テストから

平成 26 年 12 月の中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(※5)、平成 28 年 3 月の高大接続システム改革会議「最終報告」(※6)等をうけ、平成 29 年 11 月 13 日（月）～24 日（金）、平成 30 年 11 月 10 日(土)・11 日(日)に大学入学共通テスト導入に向

けた試行調査(※7.8)が実施された。平成 29・30 年度試行調査における題材と問題のねらいは次の通りである。

【第 1 問】

平成 29 年度試行調査では、題材として、現代の社会で必要とされる実用的な文章のうち、高校生にとって身近な「生徒会規約(部活動規約)」等が用いられており、それらを踏まえて話し合う言語活動の場を設定し、複数の資料を用いることにより、テクストを場面の中で的確に読み取る力、及び設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力を問うことをねらいとしている。

平成 30 年度試行調査では、題材として、共通するテーマ(言語)を扱っている二つの論理的な文章(『ヒトの心はどう進化したのか―狩猟採集生活が生んだもの』、『子どもはことばをからだで覚える　メロディから意味の世界へ』)が用いられており、探究レポートを書くに当たって、文章を読んで考えをまとめる場面で、二つの文章を関連付けながら、構成や展開をとらえるなど、テクストを的確に読み取る力、及び設問中の条件として示された目的等に応じて思考したことを表現する力を問うことをねらいとしている。

【第 2 問】

平成 29 年度試行調査では、題材として、図表や写真が含まれた論理的な文章(「路地がまちの記憶をつなぐ」)が用いられており、図表や写真と文章とを関連付けながら、構成や展開をとらえるなど、テクストを明確に読み取る力を問うとともに、設問中に示された条件に応じて考えを深め、テクストの内容と結び付く情報とそれらの適切な論理の展開を判断する力を問うことをねらいとしている。

平成 30 年度試行調査では、題材として、実用的な文章(著作権法[2016 年改正]の条文)と論理的な文章(『著作権 2.0 ウェブ時代の文化発展をめざして』)が用いられており、広報の文章(ポスター)、法的な文章(条文)、論理的な文章の構成や展開をとらえるなど、テクストの内容を的確に読み取る力を問うとともに、それらを互いに関連付けながら、設問中に示された条件に応じて考えを深め、適切に判断する力を問うことをねらいとしている。

【第 3 問】

平成 29 年度試行調査では、題材として、文学作品(「幸福な王子」)を踏まえて創られた小説(「ツバメたち」)が用いられており、本文に即して登場人物の心情や言動の意味をとらえるなど、テクストを的確に読み取る力を問うとともに、文章に示された原作のあらすじと創作された内容との比較を通して、文学的な文章における構成や表現の工夫を読み取る力を問うことをねらいとしている。

平成 30 年度試行調査では、題材として、同一の作者(吉原幸子)による詩(「紙」)とエッセイ(「永遠の百合」)が用いられており、詩とエッセイの二つを関連付けながら、書き手の心情や意図、文学的な文章における構成や表現の工夫を読み取る力を問うことをねらいとしている。

【第 4 問】

平成 29 年度試行調査では、題材として、表記の異なる二つの古文(『源氏物語』)(二つの書写本)とそれらに関係する注釈書(『原中最秘抄』)が用いられており、複数のテクストを比較することを通して、登場人物の心情や言動の意味、表現の工夫をとらえ、古文を的確に理解する力を問うことをねらいとしている。

平成 30 年度試行調査では、題材として、古文(『源氏物語』)が題材として用いられており、登場人物の心情や言動の意味をとらえるとともに、物語について話し合う生徒の言語活動の場面を想定し、和歌集との比較を通して、表現の工夫や登場人物の心情等をとらえ、古文を的確に理解する力を問うことをねらいとしている。

【第 5 問】

平成 29 年度試行調査では、題材として、漢文(殷王朝の末期に、周の西伯が呂尚[太公望]と出会った時の話)と生徒の言語活動の場面を想定し、関連する漢詩やその説明などからなる文章が用いられており、複数のテクストを比較することを通して、登場人物の心情や言動の意味等をとらえ、漢文を的確に理解する力を問うことをねらいとしている。

平成 30 年度試行調査では、題材として、故事成語の出典となる文章(現代語訳)と漢文、いずれも「狙公」(猿飼いの親方)と「狙」(猿)とのやりとりを描いたものが用いられており、テクストの比較を通して、登場人物の心情や言動の意味等をとらえ、漢文を的確に理解する力を問うことをねらいとしている。

古文が題材とされている第 4 問においては、同一のテーマで描かれた作品、時代やジャンルの異なる作品が対象として用いられていた。また、複数のテクストを比較することを通して、登場人物の心情や表現の工夫、言動の意味等をとらえ、古文を的確に理解する力を問う問題となっていた。全体を通して、題材として複数の文章や資料が提示されている、問題のねらいとして ‘複数のテクストを比較することを通して、関連付けながら’ といった文言が繰り返し示されているという共通点が見られた。

以上より、「思考力・判断力・表現力」の中でも特に複数のテクストを目的に応じて比較したり関連付けたりする力が求められていることが示されている。

(2)各調査から

「平成 15 年度小・中学校教育課程実施状況調査」(※9)の中学校第 3 学年の教師質問紙・生徒質問紙を見ると、「いくつかの文章を読み比べること」に関して、教師質問紙では「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師の割合は 18.7%であり、「生徒が興味を持ちやすい」と回答したのは 26.8%であった。生徒質問紙では「よく分かった」と回答した生徒の割合は 26.9%であり、「好きだった」と回答したのは 21.3%という結果であった。また、「読んだ後に関連した他の文章を読むこと」に関して、教師質問紙では「生徒にとって理解しやすい」と回答した教師は 35.7%であり、「生徒が興味を持ちやすい」と回答したのは 54.4%であった。生徒質問紙では「よく分かった」と回答した生徒は 25.6%であり、「好きだった」と回答したのは 23.6%とい

う結果であった。これらのことを踏まえると、比べて読むことや関連付けて読むことは、教師にも理解しにくいもの、興味を持ちにくいものとして捉えられていることが分かる。生徒だけでなく教師も比べ読みに距離をおいていることがうかがえることから、生徒は比べ読みの学習をあまり経験することがなく、苦手意識を抱いている生徒が多いことが考えられる。また、「平成27年度全国学力・学習状況調査解説資料」(※10)を見ると、国語Bにおいて複数の資料から適切な情報を得て、自分の考えをもつことに課題があることが示されている。

このことから、「思考力・判断力・表現力」のうち特に複数の文章を関係付けたり比較したりする力が不足しているということが考えられる。各調査結果を踏まえると、高等学校において複数の文章を関連付けたり比較したりする思考方法の育成・活動の機会が求められていると言える。

4.「比べ読み」に関して

「比べ読み」について、1「比べ読み」とは、2「比べ読み」の意義、3「比べ読み」の観点の3つの点について2者の先行研究をまとめた。

(1) 船津啓治(※11)

1「比べて読むことは、複数の異なるテクストを対象とし、多面的、総合的に読む活動である。それぞれのテクストに共通する点に注目でき、内容や書き表し方がどう違うのかということにも目がいく。」と述べている。

2「比べ読み」の意義と、どうおもしろいのか、どう役立つのかについて次の14項目に整理している。

【基盤】①複数で多様なテクストを対象とし、読者のコンテクストを広げる

【読書過程に沿って】②目的を持って比べ読みをする場合と、比べ読みによって目的が生ずる場合とがある、③テクスト選択の力に展開する、④筆者・作者を相対化する、⑤読みの観点を持つことができる、⑥表現様式を意識し、テクストの特徴を掴みやすい

【思考力】⑦無意識に思考操作を行う、⑧客観的・多面的・総合的に考える、⑨批判力の基礎を養う、⑩表現者意識に立ち、情報を活用・発信することにつながる

【読書行為力・読書生活力】⑪多くの読書行為に結合する、⑫多くの読書生活に結合する

【読者主体】⑬読者として育ち、主体となる、⑭自己の読みをメタ認知できる

3比べて読む観点・目的について以下のように整理している。

(文学)

【内容】○同じテーマ ○主題 ○作品世界 ○特徴・独自性

【登場人物】心情・会話・行動

【場面状況】

【構造】○事件

【表現】○描写(会話・説明・情景) ○文体 ○語彙

【作者】○同一作者 ○違う作者 ○作者のものの見方・考え方 ○構想 ○作者の表現の工夫 ○相手意識

【視点】

【表現様式】○同じ様式 ○違う様式

(2)井上一郎(※12)

1「比べ読み」とは、「観点を定めて作品の一部を焦点化して教材化を図り、学習資料(ワークシート)などで集中的に議論を深めて読むような活動を主要な目的とする。」と述べている。

2「比べ読み」の意義について、「①複合テクストを対象に行う、②最も目的的な読書活動、③自己学習力育成の方法的具体化、④思考力の育成、とりわけ課題探求力の育成に大きな効果、⑤理解することと同時に表現の工夫を見いだし、自己表現に役立てられる、というように多様な意義を有する。」とまとめている。

3「比べ読み」の観点として以下の6つを挙げ、その6点に対応した実践例を具体的に示している。

A 表現機構を中心に

【伝達メディア、目的、相手、グレード、題材・論題・テーマ、筆者(考え方・世界観・視点・ものの見方)】

1. 目的や再話者が違う二つの民話を比べる
2. 同じ民話を違う再話者が再話し、長さの違うものを比べる
3. 筆者の考え方の違いを比べる
4. 同じテーマの作品の論証の仕方を比べる
5. 同じテーマで違う作者の作品を比べる
6. 同じ作者の同じテーマの作品を比べる
7. 対談・座談の発言記録を比べる
8. 同じ作者の違うテーマの作品を比べる
9. 複数のメディアをミックスさせて比べる(TVとインターネット情報の比べ読み)

B 表現様式を中心に

10. 表現様式の特徴や違いを比べる
11. 日本の昔話と外国の昔話を比べる
12. 同じ題材を随筆と小説に書いたものを比べる
13. 同じ事件の新聞報道を比べる(国内紙相互、国内紙と外国紙、など)

C 表現方法を中心に

14. 物語や小説の語り方を比べる
15. 作品の構造や事件展開を比べる
16. 粗筋を比べる

D 表現過程を中心に

17. 初出と定本・教材を比べる
18. 原作とシナリオと映像を比べる
19. 直接体験と間接体験の書き方を比べる

E 読書・表現・創造行為を中心に

20. 感想・批評・論説を比べる
21. 論説文の悪文と推敲後の名文を比べる
22. 作品の紹介文を比べる

F 編集を中心に

23. 編集の仕方を目次などを使って比べる
24. インタビューしたものと自己表現化したものを比べる

「比べ読み」は、複数のテクストを対象とし、読みを深めたり広げたりするものであり、多様な意義を有するものであることが示されている。また、井上一郎は、「比べ読み」を具体化するときに最も重要なこととして、2つのポイントを挙げている。

(1)何を読むか〈多種のメディアテクスト〉

(2)何の観点で比べるか〈同一性・共通性と差異性〉

以上のことを前提とすると、以下のようなことに留意する必要があると述べている。

Ⅰ学習材として何を活用するか

①本教材と重ねて読むひとまとまりの補助教材資料

②学習上必要な参考知識を与える学習資料

③学習計画を構想する学習資料

④書く活動を通して学習を促進するワークシート

Ⅱ学習行為として授業過程のどこで活用するか

Ⅲ読書対象としてのテクストは、何を選択するか

Ⅳ読書・表現・創造・編集の行為モデルとしてのテクストは、何を選択するか

そして、「これらの中で現状において最も問題となるのは、読書対象もしくはモデルとしてのテクスト選択である。」と述べている。

5.『高等学校学習指導要領』での位置づけ

○『高等学校学習指導要領解説 国語編 』(平成22年6月)『国語総合』(※13)を見ると、

「読むこと」領域の言語活動例エ「様々な文章を読み比べ、内容や表現について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。」とあり、以下の内容が示されている。

「様々な文章を読み比べ」るとは、古典や近代以降の文章を問わず、また、文学的な文章、論理的な文章、実用的な文章を問わず、多種多用な文章を読み比べることである。その際、例えば、それらの文章を時代を超えた一続きの言語文化としてとらえ、古典で描かれた話が近代以降の文章にどのように描き直されているのか、対象は同じでも時を経てどのようにとらえ方や描かれ方が変化していったのか、また、和歌(短歌)や俳句のように同じ形式をとりながら近世までと近世以降とでどのように異なるのかなど、視点を定めて読み比べることが大切である。

読み比べるに当たっては、文章の内容だけでなく、表現の仕方にも着目する必要がある。また、自分なりの感想をもったり、批評したりするためには、思考力や想像力、表現力などが必要である。また、生徒各自が読み比べるだけではなく、ペアやグループで読み比べて話し合ったり、発表し合ったりするなど、学習の形態や方法に様々な工夫を凝らすことも、学習意欲を高める上で大切である。

○『高等学校学習指導要領解説 国語編』(平成30年7月)『言語文化』(※14)を見ると、

[知識及び技能]「(2)我が国の言語文化」に関する指導事項カ「我が国の言語文化への理解につながる読書の意義と効用について理解を深めること。」とあり、以下のような解説が示されている。

我が国の言語文化への理解とは、上代から近現代までの連続した時間の中で言語と文化の関わりについて、多様な視点で考えたり新たな認識を深めたりすることを指している。

具体的には、同一のテーマについて描かれた複数の作品を読み比べ、それぞれの作品の歴史的・文化的背景の違いを考えながら、人間、社会、自然などについて考えたり、当時の人々のものの見方、感じ方、考え方を味わったりすることなどが考えられる。古典を読む場合には、原文で味わうことも大切であるが、現代語訳を読んで作品の世界を身近に感じることに重点を置く読み方も重要となる。さらに、古典を翻訳した近現代の物語や小説などを読むことによって、古典の世界を身近に感じることができるだけでなく、伝統的な言語文化が享受された一つの在り方に触れることができる。また、物語や小説だけでなく、韻文や脚本、随筆、文化を論じた近現代の評論など幅広い分野の作品を視野に入れることも大切である。

また、[思考力、判断力、表現力等]「読むこと」領域の指導事項エ「作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。」とあり、以下のような解説が示されている。

「言語文化」で教材とする作品や文章は、他の複数の作品と関わりを持って成立していることが少なくない。例えば、近代以降の小説の中には、古典の説話や中国の伝奇小説を基にしたものもあり、小説とその典拠とを比較しながら読むことによって、より内容の解釈を深めることができる。他の作品などとの関係を踏まえるとは、このように、対象とした作品や文章と関係のある他の作品を読み、両者の関係を理解した上で対象とした作品や文章の内容の解釈に向かうことである。小説と原作とを比較すると、例えば、ある出来事の経緯や物語の構成にいくつかの相違が認められる。このことを踏まえて作品に描かれた人物像を解釈することによって、一つの作品だけを読むことでは得られない新たな発見や問いが期待できる。内容の解釈を深めるとは、このように、作品や文章の内容を様々な観点から捉え直し、新たな発見や問いを抱きながらその意味付けを更新し、内容の解釈をより精緻で整合したものに統合していくことである。

[思考力、判断力、表現力]「読むこと」領域の言語活動例ウでは、「異なる時代に成立した随筆や小説、物語などを読み比べ、それらを比較して論じたり批評したりする言語活動」とあり、以下の内容が示されている。

時間軸の視点から、設定したテーマに基づいて作品や文章を通史的に比較し、それらの共通点や相違点を明確にし、その一貫性や変化の過程を自ら考える活動が考えられる。読み比べる対象としては、例えば、古典の作品と近代以降の作品との比較、時代の異なる古典の作品同士、明治期の小説と現代小説など、様々なものが考えられる。比較して論じたり、批評したりする際には、作品や文章の内容を比較するだけではなく、例えば、「うつくし」、「やさし」などという言葉の語義をテーマに据え、作品の成立した時代背景を基

に読み比べ、時代の変化について図表でまとめたり、話し合ったりすることなども考えられる。

以上より、『学習指導要領』においても、「思考力、判断力、表現力」育成の方法として「読むこと」領域を中心に複数の作品や文章を比較したり関係付けたりすることが示され重要性が述べられている。また、比べて読む際には、内容の比較だけでなく、表現の仕方等にも着目すること、視点を定めて読むことや学習意欲を高めていくため学習の形態や方法に様々な工夫を凝らすことの必要性が示されている。

６．『国語総合』における共通教材の掲載箇所

２．国語科教科書における古典教材の分析で挙げた小・中・高共通教材(『奥の細道』、『竹取物語』、『徒然草』、『枕草子』、『平家物語』)について『国語総合』9 社においてどの部分が掲載されているのか分析を行った。各教材の掲載箇所は以下の通りである。

『奥の細道』	東京	三省	教育	大修	数研	明治	筑摩	第一	桐原
序	○	○	○	○	○	○	○	○	○
旅立ち	○	○	○	○	○	○		○	○
草加								○	
那須野		○							○
白河の関		○	○				○		
平泉	○		○	○	○	○	○	○	○
立石寺	○	○		○		○	○	○	
大垣	○		○						

	『竹取物語』	東京	三省	教育	大修	数研	明治	筑摩	第一	桐原
かぐや姫の発見と成長	今は昔～うつくしうていたり	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	翁いふやう～ゆたかになりゆく	○	○		○	○	○	○	○	○
	この児～かぐや姫とつけつ		○	○	○	○	○	○	○	○
	このほど～遊びをぞしける		○	○	○		○	○	○	○
	世界の男～めでて惑ふ		○	○	○		○	○	○	
	そのあたり～障らず来たり			○						
かぐや姫の嘆き							○	○	○	
かぐや姫の昇天		○				○				
天の羽衣		○		○						
富士の山		○								

『徒然草』	東京	三省	教育	大修	数研	明治	筑摩	第一	桐原
つれづれなるままに（序段）	○	○	○	○	○	○	○	○	○
神無月の比（第11段）	○	○			○			○	
同じ心ならん人と（第12段）					○				
折節のうつりかはるこそ（第19段）				○					
しづかに思へば（第29段）			○					○	
雪のおもしろう降りたりし朝（第31段）	○		○						
九月廿日の比（第32段）	○	○						○	
公世の二位のせうとに（第45段）		○		○					
応長の比、伊勢国より（第50段）			○						
亀山殿の御池に（第51段）	○	○	○						
仁和寺にある法師（第52段）			○					○	
是も仁和寺の法師（第53段）				○					
名を聞くより、やがて面影は（第71段）		○				○	○		
奥山に、猫またといふものありて（第89段）	○	○	○	○	○	○	○		○
或人、弓射ることを習ふに（第92段）	○	○		○	○	○	○	○	○
高名の木登りといひしをのこ（第109段）		○	○	○	○			○	
友とするにわろき者（第117段）		○			○				
花はさかりに（第137段）		○	○	○	○	○	○	○	○
相模守時頼の母は（第184段）			○						
城陸奥守泰盛は（第185段）	○								
或者、子を法師になして（第188段）	○								
今日は、そのことをなさんと思へど（第189段）	○								
丹波に出雲と言ふ所あり（第236段）	○	○	○		○		○	○	○

『枕草子』	東京	三省	教育	大修	数研	明治	筑摩	第一	桐原
春はあけぼの	○			○	○			○	
にくきもの	○	○		○					
虫は	○			○					
ありがたきもの	○		○						
中納言参り給ひて					○			○	
はしたなきもの				○				○	
うつくしきもの	○								
近うて遠きもの					○				
遠くて近きもの					○				
五月ばかりなどに山里にありく	○	○							
雪のいと高う降りたるを			○	○	○				

『平家物語』	東京	三省	教育	大修	数研	明治	筑摩	第一	桐原
祇園精舎	○	○	○	○	○	○		○	○
富士川						○			
宇治川先陣			○						
木曾最期	○	○	○	○	○	○	○	○	○
坂落						○			
壇浦合戦				○					
能登殿最期						○			

『国語総合』における 5 つの共通教材の掲載箇所をまとめると、『徒然草』や『枕草子』などの随筆ではばらつきが見られたものの、全体を通して掲載されている箇所には共通して扱われている部分があることが分かる。以上のことから、授業構想をする際には、共通教材の中でも定番とされている箇所を中心に取り組んでいく。

７．「比べ読み」の可能性

６．『国語総合』における共通教材の掲載箇所での分析結果をもとに、5 つの共通教材において、どのような「比べ読み」が考えられるか具体化を行った。具体化を行うに当たり、井上

一郎が「比べ読み」を具体化するときに最も重要なこととして挙げている(1)何を読むか、(2)何の観点で比べるかの 2 つのポイントを参考とした。

『奥の細道』

◇平泉

(1)『曽良随行日記』(五月十三日)

『奥の細道』同行の際に記された日記であり、旅の事実をそのまま記録しているものである。

(2)内容や表現に着目することで『奥の細道』では体験的事実に加え、創作性や文学性を含んでいることに気付くことができる。

(1)『野ざらし紀行』(不破の関)

江戸時代の俳諧紀行文であり、秋風に託して寂しく滅んでいった者達への哀悼を述べている場面である。

(2)同じ作者の異なる作品を同じテーマから読むことで、芭蕉の悲運のうちに漂白を余儀なくされた武士達に対する同情、憐れみの深さや人の世のはかなさを強く感じているという心情に迫ることができる。

『竹取物語』

◇かぐや姫の誕生

(1)『海道記』(富士山伝説-かぐや姫の物語)

鎌倉時代の紀行文であり、富士山を過ぎる折、この地にまつわる伝承として書き留められたものである。かぐや姫が鶯の卵から生まれる点や美しさの表現等に特徴が見られる。

(2)内容や、登場人物、表現や構造などいくつかの観点から比較を行うことが可能であり、時代による人々の価値観の違いや『竹取物語』の物語性等に気付くことができる。

◇貴公子の求婚、かぐや姫の昇天

(1)『今昔物語集』(巻第三十一 竹取翁見付女児養語第三十三)

平安時代末期の説話集である。この説話では、難題が五つではなく、三つとなっている点に特徴がある。また、『竹取物語』と比較すると、帝の求婚からかぐや姫の昇天までの流れが短くまとめられている印象を受ける。

(2)内容や表現といった観点から比較を行うことで、それぞれの表現の工夫に気付くともに、物語文学である『竹取物語』の魅力について考えることができる。

■『新 精選国語総合 古典編』他(明治書院)

江國香織の現代語訳を載せ、「原文の該当箇所を読んでみよう。また、江國香織訳の現代語訳と比較して、感想をまとめてみよう。」といった活動を入れている。古典が今も日本文化を作り続けていることを実感させるとともに、現代語訳と原文とを比較することで、言葉の補足、換言、句読点の位置を変えることで分かりやすくなっていること、つながりが滑らかになり、前後の関係が捉えやすくなっていることに気付かせることを目的としている。

■『精選国語総合 古典編 改訂版』他(筑摩書房)

読解の一つとして、「この話を『桃太郎』や『一寸法師』の話と比較して、似ている点を指摘しなさい。」といった問いを設けている。異常な誕生の仕方が似ていることや、その子が、育てた者に幸運をもたらすことが共通していること、そして、「小さ子物語」という一つの型を見出だすことができることに気付かせることを目的としている。

『徒然草』

◇花は盛りに(第百三十七段)

(1)『ささめごと』室町時代中期の連歌論書である。

『正徹物語』室町時代前期の歌論書である。

兼好の言葉に対して、共感を示し、芸術精神を絶賛している。

『玉勝間』(兼好法師が詞のあげつらひ)

江戸時代後期の随筆である。兼好の言葉は風流を装っているのであり、真の人情には反していると批判している。

(2)兼好の言葉に対して、正反対の評価が述べられている。一つの題材についてそれぞれの作者の考え方に触れることで、複数の視点を意識して読むことができ、自分の考えを持つことにもつながる。また、兼好の美意識、自然観についてより深く考えることができる。

◇同じ心ならん人と・友とするにわろき者(第十二・百十七段)

(1)「友人の条件」松村栄子(『改訂版 国語総合 古典編』他)

『徒然草』第十二段と第百十七段を読んで書かれた随想である。

(2)友人関係、人間関係のあり方という同じテーマからそれぞれの作品を読み、比べることでそれぞれの特徴に気付きやすくなり、兼好の語る友人関係、人間関係のあり方について理解する上での補助となる。また、今を生きる人が書いた作品との比較によって、古典作品を身近に感じ、自分自身に引き寄せて読み味わうことができる。

『枕草子』

◇雪のいと高う降りたるを

(1)『十訓抄』

鎌倉時代中期の説話集である。「雪のいと高う降りたるを」の箇所を中心とし評価を述べているのに加え、清少納言そのものへの評価にも言及している。

『紫式部日記』

平安時代中期の日記である。清少納言による漢籍引用の方法全体についての評価が述べられている。

(2)二つの文章は清少納言への評価が大きく異なっている。この違いはどういうところから来ているものなのか考えることで、時代差や政治的対立、作者の問題や評価の観点の違い等さまざまな視点から作品にふれることができる。また、権現化されている作品にも、様々な評価があり、その背景には時代状況や政治情勢なども関連しているということに気付くことができる。(※15)

(1)『古今和歌集』(雪について詠まれた和歌「わが宿は雪ふりしきて道もなし踏みわけてとふ人しなければ(322 番歌)」など)(※16)

平安時代に編纂された最初の勅撰和歌集である。雪は代表的な冬の景物として様々な詠まれ方をしている。

(2)『枕草子』に見られる雪の場面と、同じ時代に成立した作品である『古今和歌集』での雪の詠まれ方との比較を行

うことで、『枕草子』では、雪を美的な景としてのみ見るのではなく、その中に生きる人間の姿を、時には共感を持って、また時には風景の一要素として突き放した視点から描き出すことが特徴となっていることに気付くことができる。清少納言のものの見方や関心の所在についても深く考えることができる。

『平家物語』

◇木曽の最期

(1)『源氏物語』(玉鬘)

平安時代中期の物語である。女性達の正月用の装束を整えるために、光源氏が紫の上を前にして、それぞれに似合う色合いを選んでいく場面である。

(2)義仲の人物描写に着目し、女性達それぞれの姿や人となりが読者に明瞭に伝わってくる『源氏物語』の場面との比較・関連付けを行うことで、全てを書かず色彩や材質等の装束描写をいれることにより読者はその人物の姿を具体的にイメージできること、空白になっている顔の部分をそれぞれ自由に想像させることでより一層の共感を誘う効果があることに気付くことができる。

(1)『吾妻鏡』(寿永三年一月二十日条)

鎌倉時代の歴史書で、義仲の最期を記した資料である。義仲が「近江国粟津辺」で「相模国住人石田次郎」によって討たれたことが確認できる。

(2)文体に着目することで、淡々と簡略に事実のみを伝える資料と、巴との別れや追いつめられた義仲の心を表す言葉、兼平とのやりとりなどを描く物語との違いに気付くことができる。表現等を意識し、内容をより深く味わうことにもつながる。

(1)『玉葉』(寿永三年一月二十日条)

平安時代末期から鎌倉時代初期の日記であり、義仲最期のいくさの経緯が記されている。

(2)出来事の確認だけでなく義仲の人物像について貴族の立場からの記述に触れることで、『平家物語』における義仲の人物像を意識し、細部にまで目が向けられる。また、義仲が都の上流貴族にとってどのような存在だったのか知ることができる。

■『新編国語総合 改訂版』(大修館)

学習のポイントの一つとして、「『平家物語』を題材とした能や歌舞伎など古典芸能にはどのようなものがあるか、調べてみよう。また、現代の小説や映画、テレビドラマで『平家物語』の登場人物を扱ったものを探して、原作と比較してみよう。」といった活動を示している。解説には、江戸時代の浄瑠璃である近松門左衛門作の「平家女護家島」や二世竹田出雲らの「義経千本桜」、明治以降の小説では、小泉八雲『怪談』の「耳なし芳一」、吉川英治『新・平家物語』、宮尾登美子『宮尾本平家物語』、橋本治『双調平家物語』、漫画では横山光輝『平家物語』(日本の古典)、手塚治虫『火の鳥・乱世編』など幅広く紹介されている。平家が悪役で源氏が善玉、というような単純でわかりやすい設定から、平安貴族社会から鎌倉武士社会への転換期に生きた等身大の人間像を様々に描くものなど、ジャンルにこだわらず比較してみることを提案している。

8.「比べ読み」の授業実践

小・中・高共通教材の1つとして挙げていた『竹取物語』を教材とした「比べ読み」の授業を高等学校2年生を対象に行った。詳細を以下に示す。

【対象】高等学校2年生(生徒数 男子23名、女子13名)

【本時の目標】古文を楽しもう。

【教材】

『竹取物語』冒頭部

> いまはむかし、たけとりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつつ、よろづのことにつかひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

『海道記』(富士山伝説-かぐや姫の物語)冒頭部

> 昔、採竹の翁と云ふ者ありけり。女を、かぐや姫と云ふ。翁が宅の竹林に、鶯の卵、女形にかへりて巣の中にあり。翁、養ひて子とせり。ひととなりて、かほよき事比ひなし。光ありて傍らを照らす。嬋娟たる両鬢は秋の蝉の翼、宛転たる双蛾は遠山の色、一たび咲めば百の媚なる。見聞の人は、皆腸を断つ。この姫は、先生に人として翁に養はれたりけるが、天上に生れて後、宿世の恩を報ぜむとて、暫くこの翁が竹に化生せるなり。憐れむべし、父子の契りの他生にも変ぜざる事を。

成立年代・背景やジャンルの異なる類話である『海道記』を比較対象として用いた。また、かぐや姫の誕生の仕方やかぐや姫の美しさの表現等に違いが見られる箇所を比較部分とした。既習の『竹取物語』と『海道記』とを比べて読むことで、一つの作品のみを対象とした際にはなかった観点から作品にふれることができたり、表現性に気付いたりすることができると考えた。また、当時の人々のものの見方や考え方などの時代背景も作品に反映されていることに気付くことができると考え、対象として選択した。

【学習の展開】

①『竹取物語』冒頭部の復習、音読。

②『海道記』冒頭部　読み・成立等の確認、音読。

③『竹取物語』と『海道記』冒頭部の共通点・相違点について個人で考える。

④『竹取物語』と『海道記』冒頭部の共通点・相違点についてグループで話し合う。

⑤ 話し合ったことについて全体で共有する。

⑥『竹取物語』と『海道記』冒頭部を比べて読むことを通して、どちらが魅力的であると思ったか理由も含め各自ワークシートにまとめる。

⑦ 個々で考えたこと等を全体で共有する。

⑧『竹取物語』には他にも『今昔物語集』や『国定教科書 小

学校読本 かぐやひめ』等の類話があることを伝える。

【読みの観点の抽出】

▼生徒からでてきた共通点・相違点

共通点	相違点
・一文目 ・登場人物(かぐや姫、翁) ・かぐや姫きれい、かわいい ・古文、伝聞過去 ・昔話 ・作者未詳	・ひらがな⇔漢字 ・焦点、視点 ・誕生の仕方、出会い ・名前の有無 ・かぐや姫の美しさ ・前世の恩 ・「」、段落の有無 ・過去の助動詞 ・嫗の存在の有無 ・大きさの有無 ・翁/嫗に養われる ・視点、焦点

内容や登場人物についてだけでなく、言葉や構造、表現の仕方、視点等の観点からも比べて読むことを行っていた。共通点に関しては内容についての記述が多く、相違点に関しては表現や構造について目を向けている生徒が多い印象を受けた。原文を見ただけで読み取れることが先に挙げられ、古語の意味等を理解し、読み込んでいかなければ分からない観点については記述が少なかったことから、読みの深まりと出てくる観点には関係性があることが考えられる。

【『竹取物語』・『海道記』の魅力】

・『竹取物語』を選択した生徒

「ひらがなが多く、優雅で優しげな感じがするから。」、「時系列順に話が進んでいて物語として読みやすい。」、「表現が分かりやすく、読んでいて、場面がよく分かるから。」など仮名で書かれた文章や『竹取物語』の物語性に魅力を感じている生徒が多かった。

・『海道記』を選択した生徒

「かぐや姫が生まれ変わったのが面白いと思った。」、「書かれている視点に動きがあり、多角的に文章をとらえることができる上、色々な楽しみ方があるから。」など『竹取物語』にはない内容に面白さを感じたり表現に魅力を感じている生徒が多かった。

生徒は比べて読むことで昔から知っていた『竹取物語』の魅力に改めて気付いたり、時代を経て形を変えながら伝わってきた類話である『海道記』の面白さを知ったりすることができていたと考える。また、物語と紀行文というジャンルの違ったものを扱うことで、それぞれの特徴や魅力に気付くことができていた。

【成果と課題】

生徒は、比べて読むことで細部まで丁寧に読み込むことができていた。共通点・相違点に関する話し合いの中で、既習事項を振り返りながら、さまざまな観点から読み比べることを行っていた。また、生徒それぞれが比べて読んだことを踏まえ、『竹取物語』と『海道記』どちらが魅力的だと思うか自分の考えを持ってワークシートに記入することができていた。ほとんどの生徒が『竹取物語』に関して学習済みであったが、新たな観点から読みを広げたり深めたりすることができていたと考えられる。比べて読むことを通して、日本最古の物語である『竹取物語』の魅力を感じ、古典の作品の特色である長い時代を経て現代に伝わってきているという継承性に気付くことができていた。しかし、生徒の『海道記』に関する記述に「美しすぎて苦しくなるとかありえないと思ってしまう。」や「かぐや姫の容姿の比喩表現があまりきれいだと思わない。」といった内容のものがいくつか見られたことから、比べて読むことで、言葉に着目して読むことができていたものの、作品が書かれた時代に思いをはせたり、作品の成立背景や時代背景などに考えを巡らせたりしている生徒は少なかった。また、生徒の感想から、「登場人物が同じなのに違う話があるということが興味深かった。」、「書く人によって内容の表現の仕方がそれぞれ違うのがおもしろいと感じた。」、「読み比べてみるのもおもしろかった。」といった内容のものが見られたことから、比べて読むことで、生徒の興味・関心を引き出し、生徒は意欲的に学習に取り組むことができていた。

9．おわりに

本研究では、小・中・高共通教材において「比べ読み」の具体化を図り、授業実践を行った。比べて読むことは読みを広げたり深めたりするとともに、既習の教材を扱う際にも生徒の興味・関心を喚起し、学習意欲につなげる効果があった。古典を教材とする際には、歴史的・文化的背景など生徒との間に距離が生まれやすい点に関して特に手立てを講じる必要があった。今後は、具体化したものを活用し検証していくことで、「比べ読み」の意義等についてより明らかにしていく。

※1 文部科学省(2006)「教育基本法(条文)」

※2 文部科学省(2017)「小学校用教科書目録」

※3 文部科学省(2017)「中学校用教科書目録」

※4 文部科学省(2017)「高等学校用教科書目録」

※5 中央教育審議会(2014) 「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に開かせるために～」

※6 高大接続システム改革会議(2016)「最終報告」

※7 独立行政法人大学入試センター(2017)「平成 29 年度試行調査 試験問題等」

※8 独立行政法人大学入試センター(2018)「平成 30 年度試行調査 試験問題等」

※9 国立教育政策所教育課程研究センター(2005)「平成 15 年度教育課程実施状況調査(小学校・中学校)質問紙調査集計結果-国語-」『教育課程実施状況調査』

※10 国立教育政策研究所(2015)「平成 27 年度全国学力・学習状況調査 解説資料 【中学校】国語」

※11 船津啓治(2010)『比べ読みの可能性とその方法』 溪水社

※12 井上一郎(2003)『読む力の基礎・基本-17 の視点による授業づくり-』明治図書

※13 文部科学省(2010)『高等校学習指導要領解説 国語編』 教育出版

※14 文部科学省(2018)『高等校学習指導要領解説 国語編』 教育出版

※15 加藤直志(2015)「清少納言評を読み比べる-高校二年生・古典(古文・漢文)の授業実践-」『同志社国文学』同志社大学国文学会 第 82 号

※16 鈴木健一(2015)『天空の文学史 雲・雪・風・雨』三弥井書店